

【論文】

政治家の「昇進」と「声」
——大臣就任記者会見の周波数分析——

Political Career and Voice Pitch of Politician:
An Analysis of Press Conference for the Inauguration of Ministers

岡田 陽介[†]

1. はじめに

政治コミュニケーション、特に、政治家と有権者のコミュニケーションにおいては、政治家が有権者に公約や政策の内容をメッセージとして伝達し、有権者はそれを基に選挙での投票選択を決めるという前提が置かれている。政治家による有権者へのメッセージの伝達という点では、選挙の候補者に限らず首相や大臣といった要職者も同様である。

メッセージの伝達には、演説内容や政策が記載されたビラなどの言語情報によるものもあれば、見た目や演説での身振り手振り、「声」の性質など非言語情報によるものが存在する。このうち政治や選挙における非言語情報への着目は、1960年の John F. Kennedy と Richard Nixon による米国大統領選挙のテレビ討論会でのイメージの効果(Kraus 1962=1963)に焦点が当てられて以降、注目を浴びるようになった。ただし、政治家の非言語情報についての研究は、顔から判断される候補者の有能性(Todorov, Mandisodza, Goren & Hall 2005; Todorov 2017)や、選挙ポスターの笑顔と得票・当落との関連(Little, Burriss, Jones & Roberts 2007; Horiuchi, Komatsu & Nakaya 2012)など視覚情報によるものが中心であった。

本稿が焦点を当てるのは、政治家が提供する非言語情報のうち、聴覚情報としての「声」である。そもそも「声」は、人と人とのコミュニケーションにおいて最も基礎的な手段である。そこでは「声」を媒介してメッセージが相手に伝達されるが、その「声」の性質によっては仮に同じ内容のメッセージが伝達されたとしても印象は大きく異なるといえる。それは政治コミュニケーションにおいても同様であり、政治家が演説や記者会見で発する「声」によっては聞き手である有権者に伝わる印象も大きく異なるだろう。

他方、政治家は自身の掲げる政策実現のために選挙での再選や、大臣など高い役職に就くことを目指す。選挙での再選においては有権者が抱く印象を高め、得票を得ることが求められる。また、昇進によって大臣に就任した後も、政策実現のために有権者に対して良い印象を与える動機も生じるであろう。

本稿の目的は、政治家が提供する非言語情報のうち、政治家が発する「声」に着目し、大臣就任の記者会見

[†] 立教大学社会学部兼任講師

での「声」の周波数分析を通して、政治家のキャリアパス形成の結果としての大臣への「昇進」、つまり、権力や影響力の獲得がメッセージの伝達手段である「声」の性質に与える影響を明らかにするものである。

2. 先行研究

2.1 政治家の行動原理と大臣就任

政治家の行動原理には様々なものが存在するが、主として、「再選」「昇進」「政策の実現」がある(Mayhew 1975=2013; 建林 2004)。このうち、規範的には「政策の実現」が政治家の主たる行動原理となるといえるが、そのためには党内での影響力の獲得が重要となり、「再選」を重ね「昇進」することが求められる。

「昇進」のひとつのかたちとして大臣就任があらう。大臣は官僚への様々な拒否権や官僚の人事コントロールを背景として権力を有するとされる(Ramseyer & Rosenbluth 1993=1995)が、村松(2010)は2001年の官僚調査の分析の中で、政策形成や執行に関して影響力を持つアクターとして大臣への言及割合が最も高く、過去の調査(1986年)と比較して、大臣への言及が上昇していることを示している¹⁾。同様に、笠(2006)も官僚調査の分析の中で、官僚から大臣の自律性が高く認識され、大臣個人の影響力が高まっていることを示している。

大臣就任には何よりも「再選」が求められる。なぜなら、党の要職や大臣のポストの獲得は「シニオリティ・ルール」に基づいており、選挙で「再選」し当選回数を重ねキャリアパスを形成することが重要となるからである(佐藤・松崎 1986; 川人 1996; 東大法・蒲島郁夫ゼミ編 2000; 東大法・第7期蒲島郁夫ゼミ編 2008)。つまり、多くの政治家にとっては、選挙で「再選」を重ね、キャリアパスを形成した「昇進」の結果として大臣就任があり、影響力の獲得、ひいては、「政策の実現」がもたらされるといえる。

通常、新内閣発足に伴い大臣への就任が決まると、組閣後、皇居で天皇による認証を受け、初閣議や写真撮影を経て首相官邸で大臣就任の記者会見(以下、大臣就任会見)を行うのが慣例であった。ただし、菅義偉内閣(2020年9月)で行政改革担当大臣に就任した河野太郎が、大臣就任会見を「権威主義の最たるものだ」²⁾と批判し、岸田文雄内閣(2021年10月)では、官邸での大臣就任会見は取りやめとなった。なお、本稿執筆時点(2022年12月)で、組閣後に官邸で大臣が一同に会す大臣就任会見は実施されていない³⁾。

以上のように、大臣就任はキャリアパス形成の結果としての権力や影響力の獲得であるとともに、大臣就任会見は天皇による認証式や初閣議などを経て臨む点で、権力や影響力獲得の象徴の場となるといえる。

2.2 政治家と「声」

政治家の「声」については、声の高低が政治家の好感度や信頼度などの印象に与える効果や、選挙での当落に対する効果を中心に研究蓄積がなされてきた。それらは主として実験研究やサーベイ実験として実施され、実験刺激には実在した米国大統領の声の高低を操作したものや(Tigue, Borak, O'Connor, Schandl & Feinberg 2012)、声の高低が異なる(非政治家の)男女のセリフ(Klofstad, Anderson & Peters 2012; Anderson & Klofstad 2012)などが用いられている。また、米国の下院選挙や大統領選の実際の候補者を対象とし、その音声と実際の選挙結果との関連の検討なども行われている(Klofstad 2016;

Ahmadian, Azarshahi & Paulhus 2017)。さらに、有権者の特性として、米国の分析では保守派や共和党員であること、社会的支配志向性が高いほど、低い声の候補者を選択することも指摘されている (Laustsen, Petersen & Klofstad 2015)。

他方、日本を事例とした分析では、党首の音声を用いた実験による検討や衆院選の選挙区候補者の分析などによって研究が蓄積されてきた(岡田 2017a, 2021)。これらの研究でも同様に、当該政治家への印象に対する効果や得票・当落に対する影響が検討され、低い声が好感度や信頼度といった印象を高めたり、得票や当選の確率を高める効果が示されている。ただし、有権者にとって党首はメディアなどで「声」を聞く機会があるが、選挙区の候補者ではその機会に乏しく、政治家の「声」を聞くコミュニケーションが少ないことから、選挙区レベルではでの効果は限定的との留保もなされている(岡田 2021)。

以上の政治家の「声」にまつわる既存研究は、「声」が政治家の印象や有権者の投票行動を左右しう点で、政治家と有権者との間の政治コミュニケーションにおいて重要な要因となりうることを示唆している。しかしながら、これらの既存研究は「声」を独立変数とし印象形成や得票・当落との関連を扱ったものであり、「声」に従属変数とした分析、すなわち、政治家の「声」がいかなる要因によって規定されるのかについては扱われてこなかった。もちろん、独立変数としての「声」の検討に際し、政治家の性別や年齢などの属性によって周波数が異なるかなどについては検討されている。しかしながら、それらは統制変数としての扱いがほとんどであった。また、「声」の効果は聞き手に対するもの、すなわち、有権者の印象形成や投票行動に焦点が当てられたものであり、話者である政治家の「声」がいかなる状況で変化しうることについては検討されていない。

「声」が印象や選挙での得票・当落に影響を及ぼすのであれば、「声」を変化させる要因が存在する場合、「声」を通して間接的に印象や得票・当落に影響を及ぼすことになる。また、良い印象や得票を得て当選を目指す政治家にとっては、状況に応じて「声」を意図的に変化させる動機も生じらるだろう。実際、英国元首相の Margaret H. Thatcher は首相就任前後で意図的に声の高さを下げたとされるが、自伝における回顧のみならず、客観的な分析においても確認されている (Thatcher 1995=1995; Karpf 2006; Henton 1992)。また、枝野幸男は演説での発声について、「歌うときはテノールです。男性四部の場合はトップテノールです。演説等の時は、意識して低めの声を出すように留意していたら、それに慣れてきて、歌の時との差が出ています」(枝野 2017)と述べている。すなわち、政治家は地位の向上や演説の場面などで、状況に応じて「声」を低くさせていることが窺える。

2.3 地位・社会的関係と「声」

大臣就任は政治家にとってのキャリアパス形成の結果としての「昇進」であり、地位の向上を示すものである。これまで既存研究では政治家と「声」について大臣という役職や「昇進」の視点からの検討はなされてこなかった。ただし、地位と「声」の諸研究から、その関連を検討することができよう。

例えば、岡田(2016)は声の低さと好感度や信頼度との関連において、複数の職業(政治家、フライト・アテンダント、電車の車掌、看護師)の合成音声を刺激にした実験研究により、職業威信スコアの高い職業(特に、政治家)で低い声が好感度や信頼度を高める効果が高いことを示した。また Mayewら (Mayew, Parsons & Venkatachalam 2013)は、CEOのスピーチの分析から、声の低さが、経営する企業の規模や年間報

酬、在職期間を増加させるとしている。つまり、これらの研究は高い地位において低い声が求められる傾向にあることを示している。

そもそも生物学的には低い声は体の大きさや肉体的な強さを示し⁴⁾、生存や繁殖における競争での優位性をもたらすが⁵⁾、これは人においても同様であるとされる(Wolff & Puts 2010)。こうした生物学的な視点での「声」の効果は、主として身体的支配性に焦点が当てられるが、人の社会的支配性や権力のシグナルとしても機能する。Putsら(Putsa, Gaulinb & Verdolini 2006; Putsa, Hodgesb, Cárdenasc & Gaulinb 2007)は話者に対する評価において、低い声が高い声に比べ、身体的支配性のみならず社会的支配性(social dominance)があると認識されることを示した。また、他者への評価だけでなく話者自身の評価についても、低い声での発話が高い声に比べ自身の「権力」を認識させるとされる(Stel, van Dijk, Smith, van Dijk & Djalal 2011)。さらに、コミュニケーションの相手の地位によっても「声」は変化し、上位の他者に接するときは高く、下位の他者に接するときには低くなることが実験研究で指摘されている(Putsa et.al. 2006; Cheng, Tracy, Ho & Henrich 2016)。

これらの研究からは、「声」が社会的関係を規定する要因として機能したり、社会的関係によって「声」が変化したりすること、さらには、話者にとって低い声と高い地位とが結びつくことや、低い声が高地位者による低地位者への社会的支配と結びつくことが示されるといえる。

他方、社会的支配の視点から高地位者と低地位者を捉えれば、両者の関係は高地位者集団による低地位者集団に対する「支配－被支配」の関係とも位置づけられる。「支配－被支配」の関係は、高地位の者が他者を支配するのは当然という階層構造を志向する個人の態度、すなわち、社会的支配志向性(Sidanius & Pratto 1999)の強さによって維持される。したがって、高地位者が社会的支配志向性を強く持ち、「支配－被支配」の関係を望む場合、それが「声」に現れ、「声」を低くさせるもともいえる。

これらの議論を大臣就任に敷衍すれば、大臣就任は地位の向上を意味するとともに、内閣や執政府、すなわち、統治する集団への加入であり、いわば「支配－被支配」の関係においては「支配」側への加入を想起させるものでもある。もちろん、大臣個人が高い社会的支配傾向を持ち合わせているとは必ずしもいえない。しかしながら、プライミングなどによって、所属集団と他の集団との地位の関係性などが一時的に顕在化された場合であっても社会的支配志向性が変化することも示されており(Huang & Liu 2005; Guimond, Chatard, Martinot, Crisp & Redersdorff 2006)、社会的支配志向性は社会的文脈や状況によって変化するものであるといえる。つまり、高地位であるという社会的文脈が一時的であれ恒常的であれ強調されることで、社会的支配志向性は高まるといえる。また、他の政治家よりもキャリアパスを形成し、大臣に就任したという社会的文脈は、大臣の権力の認識や支配の認識を上昇させるといえる。

3. 仮説

政治家の大臣就任は、政治家の行動原理としての「昇進」(Mayhew 1975; 建林 2004)であると同時に、キャリアパス形成の結果としての権力や影響力獲得、地位の上昇を意味する(佐藤・松崎 1986; 川人 1996; 東大法・蒲島郁夫ゼミ編 2000; 東大法・第7期蒲島郁夫ゼミ編 2008)。さらに、大臣就任会は

「社会的支配性」や「権力」の象徴的場面ともなる。

また、職業威信スコアの高い職業で低い声が求められることや(岡田 2016)、他者への評価、自己への評価のいずれにおいても「声」の低さが「社会的支配性」や「権力」の強さを認識させること(Putsa et al. 2006; Putsa et al. 2007; Stel et al., 2011)、社会的文脈や状況に応じて社会支配的傾向も高まる(Huang & Liu 2005; Guimond, Chatard, Martinot, Crisp & Redersdorff 2006)ことからすれば、大臣就任会見は大臣にとって「社会的支配性」や「権力」の強さを認識させる社会的文脈として機能する。

さらに、大臣就任会見は、担当大臣としての抱負や方針を述べる場でもあり、発言内容の信頼性も求められる。したがって、低い声が好感度や信頼度を高めるという既存研究(Tigue et al. 2012; Klofstad et al. 2012; 岡田 2017a, 2021)や、政治家が声を変化させる動機を持ちうる(Thatcher 1995=1995; 枝野 2017)という点からすれば、権力や権威の象徴的場面としての大臣就任会見で「声」を低くさせる政治家の動機も働くといえよう。したがって、「政治家の大臣就任によって発言の『声』の高さは低下する」(仮説1)が導かれる。

他方、また、大臣への再任は初入閣に比べキャリアパスのさらなる形成を意味するほか、再任は影響力や権力の再獲得の認識をもたらし、その程度をさらに高めるものとなるともいえる。したがって、「政治家の大臣再任によって発言の『声』の高さは低下する」(仮説2)が導かれる。

4. データ

分析に際し必要となる音声データは、少なくとも連続した2つ以上の内閣における大臣の「声」である。連続した複数の内閣を分析対象とすることで、初入閣や再任などを考慮した上での声の高低の分析が可能になる。

本稿が分析対象としたのは、2019年9月11日に発足した第4次安倍晋三内閣(第2次改造)(以下、安倍内閣)、および、2020年9月16日に発足した菅義偉内閣(以下、菅内閣)の2つの内閣における大臣の「声」である⁶⁾。ただし、安倍内閣における安倍晋三は内閣総理大臣であり、各大臣の任命権者であることから分析対象からは除外した。他方、菅内閣における菅義偉は任命権者であるものの、安倍内閣での官房長官から総理大臣就任であったため、他の再任・再入閣の大臣と同様に扱い分析対象とした。また、いずれの内閣においても大臣が途中辞任し、新しい大臣が任命された場合には新大臣も分析対象とした。以上から、分析対象となったのは2内閣44名であった(表1)。

表1 分析対象の大臣一覧

安倍内閣 (N=21)	麻生太郎／高市早苗／河井克行／森まさこ／茂木敏充／萩生田光一／加藤勝信／江藤拓／ 菅原一秀／梶山弘志／赤羽一嘉／小泉進次郎／河野太郎／菅義偉／田中和徳／武田良太／ 衛藤晟一／竹本直一／西村康稔／北村誠吾／橋本聖子
菅内閣 (N=23)	菅義偉／麻生太郎／武田良太／上川陽子／茂木敏充／萩生田光一／田村憲久／野上浩太郎 ／梶山弘志／赤羽一嘉／小泉進次郎／岸信夫／加藤勝信／平沢勝栄／小此木八郎／河野太 郎／坂本哲志／西村康稔／平井卓也／橋本聖子／井上信治／丸川珠代／棚橋泰文

また、分析に際しては各大臣の発言が可能な限り同一条件で録音されていることが望ましい。そこで、音源となる音声データは次のような方針で入手した。まず、両内閣について、組閣後に行われた官邸での大臣就任記者会見の録画より、各大臣の発言部分を取り出した⁷⁾。記者会見に欠席するなど、音声が入手できなかった大臣については政策研究大学院大学「国会審議映像検索システム」の動画より就任直後の発言を用いた。

次に、比較対象となる、当該内閣での大臣就任前の音声については、以下の方針で音声を入手した。第1に、菅内閣で再任された大臣については、前内閣である安倍内閣就任時の記者会見の音声を用いた。第2に、菅内閣で初入閣(再入閣含む)の大臣については、「国会審議映像検索システム」の動画より大臣就任以前の国会(本会議・委員会)での発言のうち、大臣就任の直近の音声を用いた。第3に、安倍内閣では、比較対象となる前内閣(第4次安倍晋三内閣改造内閣:2018年10月2日発足)の会見音声を入手できなかったため、「国会審議映像検索システム」によって就任直近の音声を用いた。最後に、上記基準でも音声が入手できなかった場合には、就任直近の選挙での政見放送、当該大臣の個人 web サイトにおける動画などで補完した。上記方針にて入手した音声データの内訳は表2の通りである。

表2 入手方法別データの内訳

入手方法		安倍内閣 (N=21)	菅内閣 (N=23)
就任前音声	記者会見	0	12
	記者会見以外	21	11
	(内、国会議事録検索システム以外)	(1)	(2)
就任後音声	記者会見	20	22
	記者会見以外	1	1
	(内、国会議事録検索システム以外)	(0)	(1)

分析対象となった大臣の属性について、入閣経験(初入閣か再任——再入閣含む)、性別、在籍議院、年齢、在職年数について整理したものが表3である。菅内閣は安倍内閣に比べて再任・再入閣の割合が高いが($\chi^2(1) = 7.33, p = .007$)、その他の属性について内閣による有意な差は認められず⁸⁾、全体として男性、衆議院選出の割合が多くなっている。

表3 大臣の属性

	入閣経験		性別		議院		年齢 (平均)	在職年数 (平均)
	初入閣	再任・再入閣	男性	女性	衆議院	参議院		
安倍内閣 (N=21)	13 (61.9%)	8 (38.1%)	18 (85.7%)	3 (14.3%)	18 (85.7%)	3 (14.3%)	61.2	20.2
菅内閣 (N=23)	5 (21.7%)	18 (78.3%)	20 (87.0%)	3 (13.0%)	20 (87.0%)	3 (13.0%)	59.8	20.4
全体 (N=44)	18 (40.9%)	26 (59.1%)	38 (86.4%)	6 (13.6%)	38 (86.4%)	6 (13.6%)	60.5	20.3

5. 分析

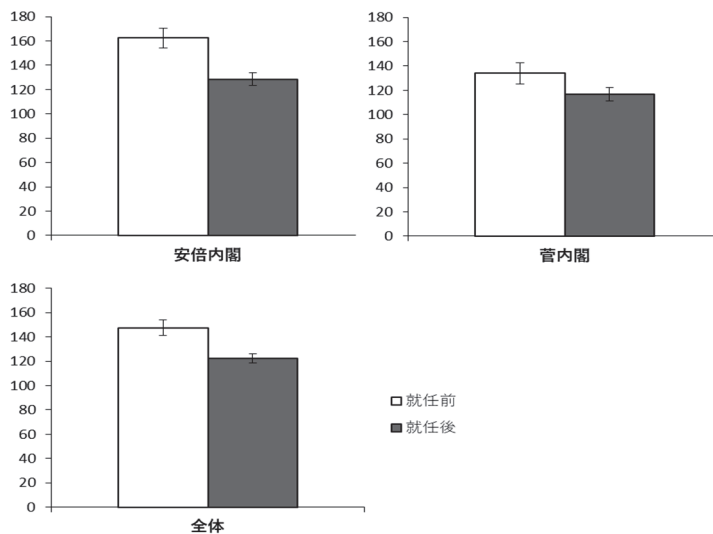
5.1 基本周波数

入手した音声データから基本周波数(F_0) (以下、周波数)を測定した。測定に際しては各大臣の音声のうち冒頭の文意の通るワンフレーズを対象とした。測定時間の平均は1.22秒($SD = 0.25$, $Min = 0.74$, $Max = 2.12$)であった⁹⁾。冒頭のワンフレーズを対象としたのは、いずれの大臣も発言冒頭で名前を名乗ることがほとんどであり、特に再任の大臣では同じフレーズを分析対象に含めることが可能になるからである。なお、測定にはPraat(Boersma & Weenink 2021)を用いた。

就任後音声について測定の結果、安倍内閣の平均は128.46Hz($SD = 24.56$, $Min = 92.50$, $Max = 182.41$)、菅内閣の平均は116.87Hz($SD = 26.09$, $Min = 91.48$, $Max = 186.70$)、全体の平均は122.40Hz($SD = 25.75$, $Min = 91.48$, $Max = 186.70$)であったが、安倍内閣と菅内閣の違いによる有意な差は認められなかった($t(42) = 1.51$, $p = .138$)。

5.2 大臣就任前後での比較

就任前後で周波数が変化するか否かを確認するため、就任前後のそれぞれの周波数の平均値に対して対応のあるt検定を行った(図1)。分析は内閣ごと、および、全体について行った。安倍内閣($M = 162.43$ vs. $M = 128.46$, $t(20) = 4.57$, $p = .000$)、菅内閣($M = 133.90$ vs. $M = 116.87$, $t(22) = 3.09$, $p = .005$)、全体($M = 147.52$ vs. $M = 122.40$, $t(43) = 5.35$, $p = .000$)、いずれにおいても差は有意であり、安倍内閣で33.97Hz、菅内閣で17.03Hz、全体で25.11Hz 程度、「声」が低くなる変化が確認できる。



注) エラーバーは標準誤差。

図1 大臣就任前後の周波数の変化(Hz)

就任後の周波数の規定要因、および、就任前後の周波数の変化の規定要因を探るため、就任後の周波数、および、就任前後の周波数の差を従属変数とする分析を行った。独立変数は、性別(女性ダミー)、年齢、再任・再入閣ダミーとし、統制変数として衆議院ダミー、在職年数を投入した。推定に際しては内閣ごとの分析と全体の分析を行った。なお、内閣ごとの分析では重回帰分析(OLS)を行ったが、全体の分析では、前内閣からの再任に伴い同一の大臣がデータセット上に存在することから、内閣と大臣個人を考慮したマルチレベル分析を行った。

結果は図2の通りである。図のプロットは推定値(非標準化係数)を示し、左右の横棒は95%信頼区間を示している。図の描画に際しては定数項を省略している。まず、就任後周波数に対する効果を確認する。効果が認められた変数は女性ダミーであった。安倍内閣($b = 29.37$, $p = .170$, 95%CI[-13.64, 72.39])では正の係数であるものの有意な効果は認められなかったが、菅内閣($b = 71.20$, $p = .000$, 95%CI[48.02, 94.38])、全体($b = 52.78$, $p = .000$, 95%CI[32.47, 73.09])では有意な正の効果が認められ、女性大臣で就任時の「声」が高いことが示されている。一般に、声帯などの体の器官の大きさの違いから男性に比べ女性の方が周波数は高くなるが(Titze 1989; Fitch & Giedd 1999)、本稿の分析結果でも同様の傾向が確認できる。なお、再任の効果は、安倍内閣($b = 10.28$, $p = .292$, 95%CI[-9.54, 30.09])、菅内閣($b = -3.65$, $p = .698$, 95%CI[-22.88, 15.59])、全体($b = 1.76$, $p = .781$, 95%CI[-10.68, 14.21])のいずれの場合も認められなかった。また、その他の変数でも有意な効果は認められなかった。

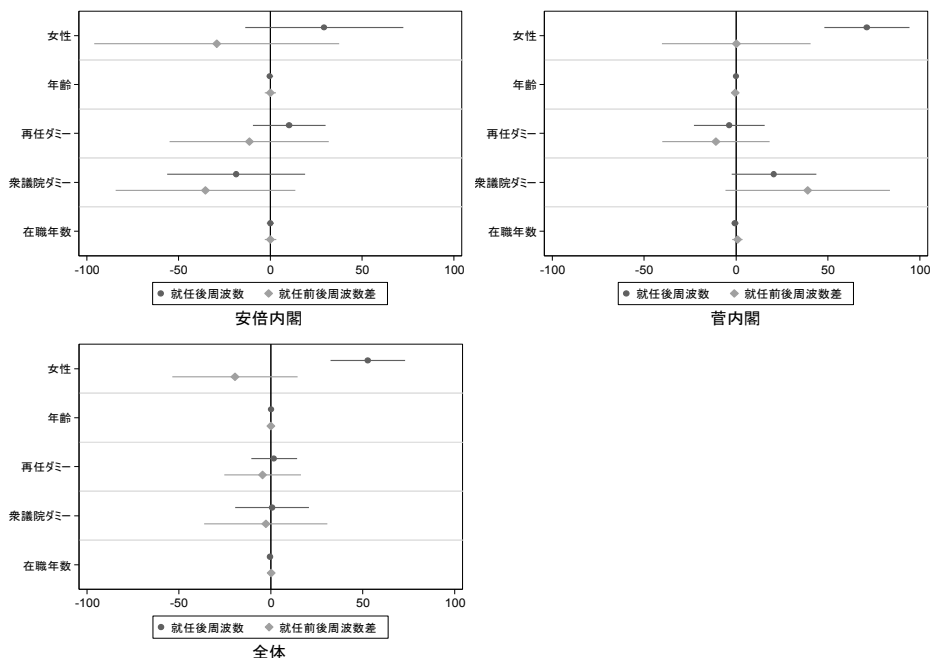


図2 就任後周波数・就任前後周波数の差の規定要因

次に、就任前後の差に対する分析では、いずれの変数も有意な効果は認められず、再任については負の係数ではあるものの、安倍内閣($b = -11.48$, $p = .586$, 95%CI[-54.81, 31.84])、菅内閣($b = -10.97$, $p = .445$, 95%CI[-40.24, 18.30])、全体($b = -4.41$, $p = .679$, 95%CI[-25.26, 16.45])ともに認められなかった。

以上から、「政治家の大臣就任によって発言の『声』の高さは低下する」(仮説1)は支持される結果となったものの、「政治家の大臣再任によって発言の『声』の高さは低下する」(仮説2)を支持する結果とはならなかったといえる。

6. 結論と含意

本稿は、政治家の「声」という非言語情報に着目し、大臣という地位への就任、すなわち、政治家の「昇進」が「声」を変化させるか否かを検討した。2内閣44名の大臣について大臣就任前後の「声」の周波数を測定し、分析を行った結果明らかになったことは、第1に、大臣の就任時会見において、それ以前と比較して「声」が低くなること、第2に、「声」を低下させる要因として、再任の顕著な効果は認められなかったことである。政治家の「声」にまつわる既存研究は、好感度や信頼度といった印象形成や得票・当落への影響が中心であったが、「昇進」という地位の向上や就任記者会見という社会的文脈や状況が「声」に変化を与えることが明らかになったといえる。

以上の結果から、次のような含意が導かれる。まず、大臣就任時にはそれ以前に比べ声が低くなるが、必ずしも「再任」によってその効果が強まるわけではないことから、大臣への「昇進」という社会的地位向上、ひいては、権力の獲得という政治家の「昇進」の象徴的イベントとしての大臣就任会見において、テンポラリーな「声」の低さがもたらされることが示唆される。

次に、社会的文脈、すなわち、政治家の「昇進」という地位向上が「声」を低くさせることの意味づけである。大臣就任は内閣や執政府への加入であり、統治する集団としての大臣という、「支配－被支配」の関係を一時的であれ想起させる。そうした社会的文脈において、社会的支配性と関連する「声」の低下が生じることは、大臣就任によって生じる潜在的なエリート民主主義的な価値観を反映しているものであるのかもしれない。

なお、本稿にも限界はある。本稿の結果をより一般化するには性別や当選回数、再任など、様々な属性を考慮した分析が求められる。そのためにはさらなるデータの入手が必要となるが、政治家の音声にまつわるデータ・アーカイブが充分でないことから過去に遡及して入手することは困難である¹⁰⁾。したがって、将来的にデータを拡充し続ける必要があるが、先述のように、官邸で一同に会す大臣就任会見は実施されておらず、同一条件での「声」の入手は難しい。もちろん、大臣就任会見が再開されることがあるかもしれないが、継続的に音声データを入手する手段の構築が必要となろう。

以上のような問題はあっても、本稿は政治家の「声」について、「昇進」という新たな視点を示し、政治家と「声」、ひいては、政治と非言語情報の研究に対して研究拡充を図るものとなったといえよう。

謝辞

本稿は、2022年度日本社会心理学会第63回大会での報告論文に、再分析を施し大幅に加筆修正を行ったものである。報告・執筆の過程で多くの方々の助言をいただきましたことに感謝申し上げます。

注

- 1) 加えて、府省内の他のアクター(副大臣、政務官、事務次官、局長、課長など)へ言及割合は低く、また、それらへの言及は過去の調査に比べれば軒並み低下していることも指摘されている。
- 2) 『朝日新聞』2020年9月18日。
- 3) 大臣就任会見の取り止めは、会見が深夜に及ぶことによる各省庁職員の負担の軽減を目的としたものでもあった(『朝日新聞』2021年10月5日)。
- 4) Fletcher(2014)は様々な生物について、体サイズと「声」の周波数の負の関連を示している。
- 5) テングザル(Koda, Murai, Tuuga, Goossens, Nathan, Stark, Ramirez, Sha, Osman, Sipangku, Seino & Matsuda 2018)、リトルペンギン(Miyazaki & Waas 2003)、アカシカ(Reby & McComb 2003)などの分析がある。
- 6) いずれの内閣も民間からの大臣登用はなかった。
- 7) 大臣辞任に伴う新大臣任命の場合は、就任直後の記者会見動画を分析対象とした。
- 8) 性別($\chi^2(1) = 0.01, p = .905$)、在籍議員($\chi^2(1) = 0.01, p = .905$)、年齢($t(42) = 0.52, p = .604$)、在職年数($t(42) = 0.11, p = .914$)。
- 9) 就任前は1.24秒($SD = 0.28, Min = 0.74, Max = 2.12$)、就任後は1.20秒($SD = 0.23, Min = 0.86, Max = 1.83$)。
- 10) 政治家の「声」のデータ・アーカイブの問題点については、岡田(2017b)を参照。

参考文献

- Ahmadian, Sara, Sara Azarshahi & Delroy L. Paulhus, 2017, “Explaining Donald Trump via Communication Style: Grandiosity, Informality, and Dynamism,” *Personality and Individual Differences*, 107: 49-53.
- Anderson, Rindy C. & Casey A. Klofstad, 2012, “Preference for Leaders with Masculine Voices Holds in the Case of Feminine Leadership Roles,” *PLoS ONE*, 7(12): e51216. doi: 10.1371/journal.pone.0051216.
- Boersma, Paul & David Weenink, 2021, *Praat: Doing Phonetics by Computer* [Computer Program], Version 6.1.55, (2021年11月3日取得, <http://www.praat.org/>).
- Cheng, Joey T., Jessica L. Tracy, Simon Ho & Joseph Henrich, 2016, “Listen, Follow Me: Dynamic Vocal Signals of Dominance Predict Emergent Social Rank in Humans,” *Journal of Experimental Psychology General*, 145(5): 536-547.
- 枝野幸男(edanoyukio0531), 2017年10月29日, 「歌うときはテノールです。男性四部の場合はトップテノールです。演

説等の時は、意識して低めの声を出すように留意していたら、それに慣れてきて、歌の時との差が出ています」Tweet, (2022年12月1日取得, <https://twitter.com/edanoyukio0531/status/924591192251105280>).

- Fitch, W. Tecumseh & Jay Giedd, 1999, "Morphology and Development of the Human Vocal Tract: A Study Using Magnetic Resonance Imaging," *The Journal of the Acoustical Society of America*, 106(3): 1511-1522.
- Fletcher, Neville H., 2014, "Animal Bioacoustics," Thomas D. Rossing, ed. *Springer handbook of acoustics, 2nd ed.*, New York: Springer New York, 821-841.
- Guimond, Serge, Armand Chatard, Delphine Martinot, Richard J. Crisp & Sandrine Redersdorff, 2006, "Social Comparison, Self-Stereotyping, and Gender Differences in Self-Construals," *Journal of Personality and Social Psychology*, 90(2): 221-242.
- Huang, Li-Li & James H. Liu, 2005, "Personality and Social Structural Implications of the Situational Priming of Social Dominance Orientation," *Personality and Individual Differences*, 38(2): 267-276.
- Henton, Caroline, 1992, "The Abnormality of Male Speech," George Wolf, ed., *New Departures in Linguistics*, New York: Garland, 27-59.
- Horiuchi, Yusaku, Tadashi Komatsu & Fumio Nakaya, 2012, "Should Candidates Smile to Win Elections?: An Application of Automated Face Recognition Technology," *Political Psychology*, 33(6): 925-933.
- Karpp, Anne, 2006, *The Human Voice: The Story of a Remarkable Talent*, London: Bloomsbury.
- 川人貞史, 1996, 「シニオリティ・ルールと派閥——自民党における人事配分の変化」『レヴァイアサン』臨時増刊号: 111-145.
- Klofstad, Casey A., 2016, "Candidate Voice Pitch Influences Election Outcomes," *Political Psychology*, 37(5): 725-738.
- Klofstad, Casey A., Rindy C. Anderson & Susan Peters, 2012, "Sounds Like a Winner: Voice Pitch Influences Perception of Leadership Capacity in Both Men and Women," *Proceedings of the Royal Society B: Biological Sciences*, 279: 2698-2704.
- Koda, Hiroki, Tadahiro Murai, Augustine Tuuga, Benoit Goossens, Senthilvel K.S.S. Nathan, Danica J. Stark, Diana A. R. Ramirez, John C. M. Sha, Ismon Osman, Rosa Sipangku, Satoru Seino & Ikki Matsuda, 2018, "Nasalization by Nasalis Larvatus: Larger Noses Audiovisually Advertise Conspecifics in Proboscis Monkeys," *Science Advances*, 4(2), eaaq0250. doi: 10.1126/sciadv.aaq0250.
- Kraus, Sidney ed., 1962, *The Great Debates: Kennedy vs. Nixon, 1960*, Bloomington: Indiana University Press. (NHK放送学研究室訳, 1963, 『大いなる論争』日本放送出版協会.)
- Laustsen, Lasse, Michael Bang Petersen & Casey A. Klofstad, 2015, "Vote Choice, Ideology, and Social Dominance Orientation Influence Preferences for Lower Pitched Voices in Political

- Candidates,” *Evolutionary Psychology*, 13(3): 1-13.
- Little, Anthony C., Robert P. Burriss, Benedict C. Jones & Craig S. Roberts, 2007, “Facial Appearance Affects Voting Decisions,” *Evolution and Human Behavior*, 28(1): 18-27.
- Mayew, William J., Christopher A. Parsons & Mohan Venkatachalam, 2013, “Voice Pitch and the Labor Market Success of Male Chief Executive Officers,” *Evolution and Human Behavior*, 34: 243-248.
- Mayhew, David R., 1975, *Congress: The Electoral Connection*, Yale University Press. (岡山裕訳, 2013, 『アメリカ連邦議会——選挙とのつながりで』勁草書房.)
- Miyazaki, Masamine & Joseph R. Waas, 2003, “Acoustic Properties of Male Advertisement and Their Impact on Female Responsiveness in Little Penguins *Eudyptula minor*,” *Journal of Avian Biology*, 34: 229-232.
- 村松岐夫, 2010, 『政官スクラム型リーダーシップの崩壊』東洋経済新報社.
- 岡田陽介, 2016, 「政治家の印象形成における声の高低の影響——音声合成ソフトを用いた女声による実験研究」『応用社会学研究』(58): 53-66.
- , 2017a, 「声の高低が政党党首の印象形成に与える影響——党首討論会の音声を用いた実験研究」『行動計量学』44(1): 17-25.
- , 2017b, 「選挙における音声アーカイブ——2014年衆院選における候補者音声周波数分析を事例として」『応用社会学研究』(59): 89-102.
- , 2021, 「候補者の『声』の高低と得票率: 2014年衆議院選挙小選挙区立候補者の分析」『応用社会学研究』(63): 97-112.
- Putsa, David Andrew, Steven J.C. Gaulinb & Katherine Verdolini, 2006, “Dominance and the Evolution of Sexual Dimorphism in Human Voice Pitch,” *Evolution and Human Behavior*, 27(4): 283-296.
- Putsa, David Andrew, Carolyn R. Hodgesb, Rodrigo A. Cárdenasc & Steven J.C. Gaulinb, 2007, “Men’s Voices as Dominance Signals: Vocal Fundamental and Formant Frequencies Influence Dominance Attributions among Men,” *Evolution and Human Behavior*, 28(5): 340-344.
- Ramseyer, J. Mark & Frances McCall Rosenbluth, 1993, *Japan’s Political Marketplace*. Cambridge, MA: Harvard University Press. (加藤寛監訳, 1995, 『日本政治の経済学——政権政党の合理的選択』弘文堂.)
- Reby, David. & Karen McComb, 2003, “Anatomical Constraints Generate honesty: Acoustic Cues to Age and Weight in the Roars of Red Deer Stags,” *Animal Behaviour*, 65: 519-530.
- 笠京子, 2006, 「日本官僚制——日本型からウェストミンスター型へ」村松岐夫・久米郁男編『日本政治変動の30年——政治家・官僚・団体調査に見る構造変容』東洋経済新報社, 223-255.
- 佐藤誠三郎・松崎哲久, 1986, 『自民政権』中央公論社.
- 政策研究大学院大学「国会審議映像検索システム」(2022年12月1日取得, <https://gclip1.grips.ac.jp/video/>).

- Sidanius, Jim & Felicia Pratto, 1999, *Social Dominance: An intergroup theory of social hierarchy and oppression*, New York: Cambridge University Press.
- Stel, Mariëlle, Eric van Dijk, Pamela K. Smith, Wilco W. van Dijk and Farah M. Djalal. 2011. "Lowering the Pitch of Your Voice Makes You Feel More Powerful & Think More Abstractly," *Social Psychological and Personality Science*, 3(4): 497-502.
- 建林正彦, 2004, 『議員行動の政治経済学——自民党支配の制度分析』有斐閣.
- Titze, Ingo R., 1989, "Physiologic and Acoustic Differences between Male and Female Voices," *The Journal of the Acoustical Society of America*, 85(4): 1699-1707.
- Thatcher, Margaret, 1995, *The Path to Power*, London: Harper Collins. (石塚雅彦訳, 1995, 『サッチャー——私の半生』日本経済新聞社.)
- Tigue, Cara C., Diana J. Borak, Jillian J.M. O' Connor, Charles Schandl & David R. Feinberg, 2012, "Voice Pitch Influences Voting Behaviour," *Evolution and Human Behavior*, 33: 210-216.
- 東大法・蒲島郁夫ゼミ編, 2000, 『現代日本の政治家像第 I・II 巻』木鐸社.
- 東大法・第 7 期蒲島郁夫ゼミ編, 2008, 『小泉政権の研究』木鐸社.
- Todorov, Alexander, 2017, *Face Value: The Irresistible Influence of First Impressions*, Princeton, NJ, US: Princeton University Press.
- Todorov, Alexander, Anesu N. Mandisodza, Amir Goren & Crystal C. Hall, 2005, "Inferences of Competence from Faces Predict Election Outcomes," *Science*, 308(5728): 1623-1626.
- Wolff, Sarah E., & David A. Puts, 2010, "Vocal Masculinity Is a Robust Dominance Signal in Men," *Behavioral Ecology and Sociobiology*, (64): 1673-1683.